

「物語言説」としての Ian McEwan :

“Solid Geometry” 分析

—— テクストの決定不可能性をめぐって ——

竹 岡 千 代

Analysis of Ian McEwan's "Solid Geometry" as Narrative Discourse

—— On Postmodern Indeterminacy ——

TAKEOKA Chiyo

“Solid Geometry” is characterized by the narrative structure with seven narrative embeddings from the present to the past. I tried to categorize the narrative structure of this text by Gérard Genette's approach to the narrative discourse. Because the narrative discourse is handed down by repetition with difference, we cannot find any origin and *telos* in it.

In this text, three persons disappear by repetition with difference. The last narrator, David Hunter proved the truth of his theory, “the plane without a surface” on his own body and disappeared. “My” great-grand father who learned of it also proved it on his friend, M's body and disappeared him. The first narrator, “I” who learned of it from “my” great-grand father's diary proved it on “my” wife and disappeared her as well. Hunter who should be responsible for the truth of his theory disappeared. In short, the origin and *telos* were lost here.

In conclusion, I showed in this paper that the text invalidated Truth, authority, origin, *telos* and diachrony in modernism and expressed postmodern indeterminacy.

はじめに

“Solid Geometry”は語り手と聞き手との関係が重層的に内包されている物語言説である¹⁾。しかもその関係は伝承形式の物語や古典文学に慣習的に見られる入れ子状の語り“narrative embeddings”の形式をとっているため、さらに複雑なものとなっている²⁾。同一ではない語り手によって、現在と19世紀末という過去とが別々に語られながら、つながりも見せているた

め、この物語は物語空間の位相も入れ子状に現れ、同時に物語内容の時間性も各位相によって層をなしているといえる。このテキストの複雑な構造をGérard Genetteの物語分析によって解明し、入れ子状の構造が果たしている役割と、テキストの意味を提示していきたい。

Narrative Discourse にまとめられた、ジュネットの物語論はロシア・フォルマリズムや Roland Barthes の理論を踏まえた批評的分析方法である。この分析方法は物語における物語言説の時間と物語内容の時間という時間的二重性を説明していきながら、「語りの水準」、「語り手」、語り手と区別し、従来の視点を厳密にした「焦点化」といった独特の用語を使い、物語の分類と徹底的な分析が試みられている³⁾。

また、近代から近代以後にかけての物語論をあげ、物語行為の意味を論じている野家氏によれば、物語は差異を伴った反復により伝承され、「自らの同一性を絶えず解体し、更新し続けることそれ自体を目的としている」ため、起源としての作者の意図と、到達すべき目標(テロス)を始めから欠いている。「物語のもつこのような『起源とテロスの二重の不在』という特質は、『作者の意図(起源)』と『作品の完成(テロス)』とを両極として形成された近代小説の概念とは真っ向から対立するもの」と説明されている⁴⁾。この観点に立てば、物語言説としてのテキストに「起源とテロスの二重の不在」がどのように現れているかを指摘することができると思う。

テキスト解釈のカギとして、現在の語り手である「わたし」が語る、「わたし」と不在の妻の Maisie との関係が曾祖父の過去から現在につながる因果関係のコンテキストを設定していることがあげられる。それは物語の成立にかかわる重要な要素である。そこで、まず「わたし」と妻の対立、そして妻の消滅は過去とどういう関係があり、どういった意味があるのかを解き明かしていくつもりである。

I

「立体幾何学」は1975年に出された Ian McEwan の短編集、*First Love, Last Rites* の中の一編である。デビュー作であったこの短編集は倒錯、気味の悪さといった形容がなされ、当時のイギリス文学界に衝撃を与えた。他方で、ストーリーテラーとしての才能が発揮された短編集という評価を受けている。⁵⁾「立体幾何学」も奇妙な方法で人が消えるうす気味わるさや、不快なものを緻密に描写するマジック・リアリズムを見せている。

話の概略は次のようなものである。現在の語り手の「わたし」は1845年に生まれ、69歳で亡くなった曾祖父の日記を編纂して、世に出すため、毎日、時間のあるかぎり読み耽っている。45年間、毎晩書き続けられた日記は45巻にものぼるが、とりわけ「わたし」が目にしたのは、曾祖父と毎晩のように訪れる友人Mとの関係、そして日記からのMの消滅であった。曾祖父は日記の書き手であると同時に、19世紀末の出来事の語り手として現れている。あとで詳しく論述することになるが、語り手である「わたし」は曾祖父の語りの聞き手に移り、曾

祖父もまた、日記に登場するMの聞き手になり、語り手のMも聞き手としての立場が変わっていく。この物語言説は伝承形式の様相を見せているため、語り手をめぐって過去へとさかのぼる形でありながら、現在の「わたし」に過去が立ち現れている。それは曾祖父が買った「ホルマリン漬けのペニス」、そして妻とMの消滅との関わりに見られる。

「わたし」は現在、仕事を持っていない。曾祖父が生活の糧をその父親の取得した簡易ファスナーの特許による収入で得ていたことから、「わたし」もおそらく同じ理由で、収入に結び付かない仕事をしていても生活できると推測される。テキストの冒頭では、「わたし」が現在の語り手として、簡単に理論家であり、自称、数学者であった曾祖父の紹介を行っている。「わたし」は無名のまま生涯を終えた曾祖父を“a very fine diarist”だと信じ、日記作家として世間に認知させたいと考え、日記の編纂をするにいったと述べられている(9)。「わたし」は編纂の仕事が終われば、休暇をとって旅に出ることと、妻メイシーと離婚することを考えていた。前者は現在も考えていることだが、後者は過去の習慣を表す語句“used to”が使われていることと「今はまったく、その必要はない。」(I used to think that at the end of it all I would try, if it was possible, to divorce my wife Maisie, but now there is no need at all.(9))と書かれていることによって、近接した過去には存在したはずの妻が現在では不在となっていることを読み手は理解する。また同時に、この文章は結末における妻が実際に消滅する伏線となっている。

現在の語り手である「わたし」は入れ子状になっている物語の一番外側の語り手として、テキストの読者に語っている。便宜的にこの語り手を語り手Ⅰとする。そして、現在と近接した過去という第2の空間の物語内容には「わたし」と妻とが作中人物として存在する。そのときの語り手は作中人物の「わたし」であり、語り手Ⅱとなる。語り手Ⅱは曾祖父の日記を読むことによって、同時に、語り手である曾祖父の聞き手ともなる。第2の空間では妻と「わたし」との恒常的な対立と曾祖父の日記内容とが交互に語られている。

先に挙げたジュネットの方法は語り手の「境位」「status」を語りの水準と物語内容に対する語り手の関係のふたつの点から4つのタイプを定義しているが、それを当てはめれば、語り手Ⅱの第2の物語空間における曾祖父の日記内容を含む語りは「物語世界内の水準」と呼ばれ、さらに語り手Ⅰの「わたし」のように、語り手が自分の語る物語内容の中に作中人物として登場する場合にはこの物語は「等質物語世界外のタイプ」の物語言説として、次の分類の(2)に入る。

If in every narrative we define the narrator's status both by its narrative level (extra-or homodiegetic), we can represent the four basic types of narrator's status as follows: (1) *extradiegetic-heterodiegetic*-paradigm: Homer, a narrator in the first degree who tells a story he is absent from; (2) *extradiegetic-homodiegetic*-paradigm: Gil Blas, a narrator in the first degree who tells his own story;⁶⁾

(3), (4)については後述する。

そしてジュネットの方法によれば、語り手 I が作中人物の「わたし」が知っていることしか語っておらず、「わたし」という一人の人物の視点が一貫して守られているため、これは「内的固定焦点化」の物語となる⁷⁾。上記の物語形式を前提として、次章で 1, 2 の物語空間を見ていきたい。

II

まず、妻と「わたし」との関係を見ていくこととする。妻は一日中、家で精神分析やオカルトの本を読み、星占いやタロットカードに凝っている。また毎晩のように悪夢をみては「わたし」を起こす。昼間も書斎にきては「わたし」に同じ悪夢の話をしようとする。

Often Maisie would shout in her sleep and I would have to wake her. 'Put your arm around me,' she would say. 'It was a horrible dream. I had it once before. It was in a plane flying over a desert....' 'Go to sleep now', I said through a yawn. 'It was only a dream.' 'No,' she cried. . . . 'Well, I have to sleep now,' I told her. . . . She shook my shoulder. 'Please don't go to sleep yet, don't leave me here.' 'I'm in the same bed,' I said. 'I won't leave you.' . . . But my eyes were already closing. (10)

During supper yesterday Maisie claimed that a man locked in a cell with only the Tarot cards would have access to all knowledge. She had been doing a reading that afternoon and the cards were still spread about the floor.

'Could he work out the street plan of Valparaiso from the cards?' I asked. 'You're being stupid,' she replied. (12)

妻はなにか病んでいて、助けを求めているように思える。しかし、「わたし」は妻の言うことには全く関心がない。それどころか妻の真剣さをからかい、妻の抱えている問題を深く考えてみようともしない。つまり、「わたし」にとっては意味のない妻の話を聞かなければならない結婚生活は苦痛だったといえる。だから日記に没頭していたとも考えられる。

結婚生活の悪化を示すものとして、流血するほどのけんかがあった。曾祖父と同様、「わたし」も毎晩、日記を書いていた。「わたし」が洗面所にこもって、妻とのことを日記に書いているとき、妻が月経が始まったから、トイレを使っていないなら早く出てと扉の向こうで叫んだり、扉をけとばしたりし始めた。しかし、「わたし」はそれを無視し、書き終えてから出た。(Now Maisie was kicking the door. 'My period has started and I need to get something.' I ignored her yells) (12) 妻は待ち伏せして、「わたし」の頭に靴をふりおろしたため、耳が切れ

て出血する。そのあと、今度は妻が洗面所から出てくるのを待ち伏せしていた「わたし」も同じように妻の頭に靴をふりおろす。二人の間には何の和解も示されない。妻の過激さの原因はおそらく、「わたし」が妻の月経を妻の神秘的なものへの志向と同じく、価値のないものととらえているからであろう。

上記の引用にある「タロットカードの独房の男があらゆる知恵に近づける」と言った妻に対して、「わたし」が現実的な人間として、クリーニング屋を始めるいい方法や、オムレツを作る最良の方法などをその男が知っているのかと言うのは妻の言うことをばかにしている。そうでなければ、お互いが現実、非現実あるいは、合理、非合理という対立的な立場に依拠していることを理解しようとしていないのである。こういうかみ合わない口論は何度も出てくるが、口論の果てに、「なぜ、あなたは本当のことを言わないの。」(13)という妻の言葉が究極の問いとなって二人に沈黙をもたらすと描かれている。「本当のこと」とは結婚に飽きたことや、妻に関心がないこと、さらに離婚願望であろう。「わたし」は「本当のこと」を口にせず、うわべはいい夫を装っている。妻の夫に対する怒りは現実逃避にある。「わたし」は妻が現実生活から離れた神秘的世界に熱中していることをばかにしているが、「わたし」も同様であることを自覚していない。

また、わたしが妻に決定的な憎しみを抱いた事件があった。あるとき、妻は香水をつけ、「わたし」の体に触れてきて寝室に誘ったのだが、「わたし」は欲望をまったく感じないので拒絶した。すると妻は「あなたはひとりよがりよ」と金切り声をあげて、「わたし」の大事にしていた「ホルマリン漬けのペニス」の入ったガラスビンを壁に投げ付けて粉々にしてしまったのである。それは曾祖父がMのオークションで買ったニコルス船長のペニスであった。ホルマリン漬けたペニスはただの気味の悪い汚らしいものになり、結局、木の下に埋めるしかなかった。「わたし」には「わたしと曾祖父の人生をつなぐもの」だったため、妻に壊した理由を何度も問い、憤りの気持ちでいっぱいになっていた。そして、壊した理由を妻の嫉妬だろうと次のように、自ら導き出す。

Maisie had destroyed an object of great value to me. It had stood in his study while he lived, and then it had stood in mine, linking my life with his. (18)

She seemed a long way off, and as I looked at her my resentment merged into a familiar weariness of our marriage. I thought, why did she break the glass? Because she wanted to make love? Because she wanted a penis? Because she was jealous of my work, and wanted to smash the connection it had with my great-grandfather's life? (22)

「なぜ、あんなことをしたんだ」と妻に聞いても、妻にとっては何の価値もないものだったため、反省の色も見せず、「お気の毒だけど、あんなことになるとは思わなかったの。許してく

れるでしょ」(22)と言うだけである。ここで、「わたし」の倦怠感はテキストの最後に妻を消滅させるという「突然の決意」に変わる。

妻には「わたし」が曾祖父の日記に没頭し、相手をしてくれないことに不満があったのは確かだろう。しかし、妻の行動には嫉妬からだけではない象徴的な意味がある。曾祖父の代から保存されていたペニス(18)は過去から連綿と続く男中心の家を象徴しており、女が疎外されてきたことを示している。「わたし」は曾祖父とそのペニスに対して、妻より親しみを覚えているのは、例えば、そのペニスを埋める前に、精子の中に入っているホムンクリのことや、あちこちの旅先で女性と関係をもつただろうニコルス船長のことをしみじみと考えている姿に見られる(18)。しかし、こういうことにまじめに思いをはせているのは他人にしてみたら滑稽だが、「わたし」の女性嫌悪にもとづく、Eve Sedgwickのいうホモソーシャリティーへの傾倒の現れと考えれば説明がつく⁸⁾。妻の精神状態はかなり、不安定な様相を呈しているのに、「わたし」には曾祖父の日記や保存されたペニスといった男同志のつながりのほうが重要なのである。「私は考えを整理したいの」と言う妻は「きみは何もしていない、なにかしなければならぬ」と言う「わたし」との口論に疲れ果てている(14)。妻と「わたし」との軋轢と「わたし」のホモソーシャリティーへの傾倒とが、「突然の決意」となり、妻を消滅させてしまった。

では、次章では第3から6の物語空間について考えていくことにする。

III

物語空間を順に見ていきながら、最初に述べたように、このテキストがテロスの不在に行き着く、つまり物語内容の事実性に最終的に責任をとる言説の主体が不在となること、同時にそれが起源の不在となることを検証していくことにする。

第3の物語空間の語り手は曾祖父(語り手Ⅲ)、聞き手Ⅲは「わたし」となる。また、第4の物語空間の語り手は語り手Ⅳとなる日記に登場するM、その聞き手Ⅳは曾祖父と同時に「わたし」である。第5の物語空間ではMの友人の息子である、アメリカ人の若い数学者Goodmanが語り手Ⅴとなって、Mが聞き手Ⅴとなる。第6の物語空間では、そのグッドマンが聞き手Ⅵとして、数学の国際会議で出会ったHunter(語り手Ⅵ)の新理論の実践を見聞きし、それが書かれた資料を預かる。後日、その資料はMに渡される。最後の第7の空間ではハンターが再び、語り手Ⅶとなり、聴衆の聞き手Ⅶに会議で新しい理論を発表する。前章で述べたジュネットの物語言説のタイプから分類すれば、それぞれの物語空間の語り手自身が登場する物語内容を語っているので、やはり、第1、2、3と同様に第5から7の物語言説は「等質物語世界のタイプ」となるが、語りの水準は伝え聞いた話を語る「物語世界外」となる。4は下記の引用にあるように、(3)の「異質物語世界内のタイプ」となる。また、語り手の視点は通時的に見れば、一つの出来事、つまりハンターの理論と実践を何人もの人物の視点から物

語る「内的多元焦点化」に分類される。ただ、それぞれの物語空間を切り離して共時的に考えると、「内的固定焦点化」と分類することも可能である。下の二か所からの引用はそれぞれ語りのタイプ(3)(4)と「焦点化」について、ジュネットが分類したものである。

(3) *intradiegetic-heterodiegetic*—paradigm: Scheherazade, a narrator in the second degree who tells stories she is on the whole absent from; (4) *intradiegetic-homodiegetic*—paradigm: Ulysses in Books IX - XII, a narrator in the second degree who tells his own story.⁹⁾

So we will rechristen the first type (in general represented by the classical narrative) as *nonfocalized* narrative, or narrative with *zero focalization*. The second type will be narrative with *internal focalization*, whether that be (a) *fixed*—canonical example: *The Ambassadors*, where everything passes through Strether; . . . (b) *variable*—as in *Madame Bovary*, where the focal character is first Charles, then Emma, then again Charles; . . . or (c) *multiple*—as in epistolary novels, where the same event may be evoked several times according to the point of view of several letter-writing characters; . . .¹⁰⁾

問題となるのは第3と4の物語空間で、Mが忽然と消えたことである。その後も日記は書き続けられるが、第4の物語空間はMが消えるのと同時に消える。

Mは学究肌で、合理的な実務家と紹介されている。15年間も毎日のように、曾祖父を訪れては共に食事をし、会話をしていた。従って、曾祖父の日記にはMが始終、登場する。曾祖父が Nottingham に一度出かけた以外、生まれた Melton Mowbray から出たことのない生涯を送ったのに対し、Mはロンドンや大陸にもしばしば出かけ、新しい知識を得ては曾祖父に披露していた。曾祖父にとって、Mは必要な人間であった。「わたし」が曾祖父とのつながりとして考えていたニコルス船長のペニス はMの会社が1875年に行ったオークションで曾祖父が手に入れている。その保存されたペニスが現在の妻とわたしとの関係に重要な転機をもたらすという意味で、ジュネットのいう物語言説における物語の発着装置となっている。また、Mの消滅もわたしの妻の消滅に大きく影響している。このふたつはジュネットが時間的位置関係を示すために用いた「後説法」“*analepsis*”の形式であると指摘できる¹¹⁾。物語内容の現時点に対して先行する出来事を後になってから喚起する一切の語りの操作が「後説法」と呼ばれる。第6、7の物語空間に見られるウィーンで行われた16カ国参加の数学国際学会でのハンターの新理論の発表がふたりの消えた謎を解くものとなる。ハンターは“the plane without a surface”(16)を発見したと言い、その証明として、取り出した紙を切ったり、折り畳んだりを繰り返し、最後に紙を消してしまう。聴衆は価値のない「奇術師の手品」だとして、激しい怒り、非難、弾劾の声をハンターに浴びせたが、それは同時に、今までの数学の依拠した原理を覆してしまうかもしれない「根底にある不安」(19)を示していた。ハンターは次に、自分

の体を使って「表面のない平面」を証明する。つまり、消えてしまったのである。Mは第4の物語空間で、曾祖父にハンターの理論のすばらしさを次のように語っている。

I came into the possession of certain documents which not only invalidate everything fundamental to our science of solid geometry but also undermine the whole canon of our physical laws and force one to redefine one's place in Nature's scheme. These papers outweigh in importance the combined work of Marx and Darwin.(15-16)

グッドマンの言うことが本当なら、その理論は自然科学の法則という規範全体を危うくし、自然の体系におけるヒトの位置付けを再定義するとまでMは述べている。確かに「表面のない平面」が証明されれば、今までの定理すべてに疑問を投げかけ、決定不可能性を提示してしまう。しかし、Mはアメリカ人に懐疑的であり、グッドマンの話を信用していない。それぞれの空間で聞き手となった曾祖父と「わたし」はいんちきまがいのものとは考えず、まじめに受け取っている。曾祖父はMから受け取ったハンターの資料を研究し解明する。そして、同時に「わたし」もMが消えた理由を知ることになる。

At the bottom of a page of mathematical scribble he wrote, 'Dimensionality is a function of consciousness.' Turning to the entry for the next day I read the words, 'It disappeared in my hands.' He had re-established the plane without a surface. And there, spread out in front of me, were step by step instructions on how to fold the piece of paper. Turning the next page I suddenly understood the mystery of M's disappearance.(20)

曾祖父はハンターの理論を懐疑的だったMの体を使って実験し、「表面のない平面」つまり、人間の体からも面をなくし、消してしまったのである。その日以降、曾祖父の日記からMについての記述がなくなった理由も「わたし」は理解する。

先にジュネットの分類によって、このテキストの語り手の境位（語りの水準）を（2）の「等質物語世界外のタイプ」としたが、Mの語りは自分が概して登場することのないいくつもの物語内容を語る「異質物語世界内のタイプ」として分類することも可能である。

We are dealing here with an absolute reversal, since we move from a situation characterized by the complete dissociation of the instances (first and extradiegetic author-narrator: "I", second narrator, intradiegetic novelist: "C."; metadiegetic hero: "Jean") to the inverse situation, characterized by the merging of all three instances in one single "person": the author-narrator-hero Marcel.¹²⁾

第7の物語空間で、数学者ハンターが国際学会で語った理論はMを消すことになった。しかし、問題はハンターが消えてしまったことによって、だれもその理論の責任をとるものがいなくなったことである。つまり、このテキストはテロスと主体の不在を見せていると言える。

他方で、第1, 2の物語空間における妻の消滅はやはり、日記を見た「わたし」が曾祖父がMに実践したように、妻の体にハンターの理論を実践したためである。ただ、ハンターと曾祖父とが実践したときは単に数学的な理論を証明するという目的であり、ほかの意図はなかった。しかし、「わたし」は妻に対する憎しみから、次のように理論を応用することになった。

I leaned over her and kissed the nape of her neck and brought her arms behind her back. She liked to be manipulated in this way and she submitted warmly. . . . ‘Careful, careful, that hurts,’ she suddenly shouted, and tried to struggle. But it was too late now, Now the positioning of her limbs expressed the breathtaking beauty, the nobility of the human form, I felt the trance coming on again and the numbness settling over the back of my head. As I drew her arms and legs through, Maisie appeared to turn in on herself like a sock. ‘Oh God,’ she sighed, ‘What’s happening?’ and her voice sounded very far away. Then she was gone...and not gone. Her voice was quite tiny. ‘What’s happening?’ and all that remained was the echo of her question above the deep-blue sheets.(23-24)

「わたし」が優しく抱くふりをしながら妻を消していく冷酷な様子には「表面のない平面」の証明が証拠に残らない殺人に変わったことを示している。「わたし」が実行に移したことはハンターと曾祖父とが実践したことと同じだが、その起源はハンターの消滅によってもはやないといえる。

結 び

入れ子状の物語構造の最後の部分には立体幾何学における偉大な発見があったが、学会が示した拒絶反応と同じく、一般にも真理として受け入れられるものではない。もちろん、ハンターが残したとされる資料には「表面のない平面」を作り出すための手順が定理や数式と共に示されていたが、第1の物語空間の読み手には実践するのは不可能である。ほかの場面でも、このテキストはMの披瀝する新しい、怪しげな知識を曾祖父が真摯に受け止め、セックスの体位をまじめに話題にしたり(11)、経済学者 Thomas Malthus の『人口論』(13)を価値のない笑い話にすり替えている。そこには権威や真理を茶化し、根底から覆そうという意図が見える。また、今までの科学の真理をすべて無効にするかもしれない理論はハンター自身と曾祖父と「わたし」には真理であったが、曾祖父のハンターの理論を解明して言った「次元は

意識の機能である」(20)という言葉はその真理が絶対的な真理とは言えないことを如実に物語っている。入れ子状になった物語空間は語り手と聞き手との差異を伴う反復を明確にし、同様に真理かどうかの曖昧さを繰り返し、結局、真理を無効にする構造であった。具体的には果たして、曾祖父と「わたし」とが行った理論の実践は真実なのかどうかを証明するのも不可能にしてしまった。物語の同一性の反復と解体は理論の証明ができるはずのMと妻の消滅、責任をとるべき主体であったハンターの消滅が示唆している。

このテキストは近代には存在した絶対的真理、権威、語りの主体を無効にし、起源とテロスの不在を示し、歴史の通時性を相対的にとらえ、すべてを曖昧なものとしている。そのなかでも、新たな理論を真理として証明する決定不可能性はテキストのポストモダニズム性をはっきり打ち出すものと言えるのである。

註

- 1) Ian McEwan, "Solid Geometry", *First Love, Last Rites* (London: Picador, 1976) これ以降の作品の引用はこの版によるものとし、かっこ内にページ数のみを記す
- 2) 物語分析の中で、Mieke Balは入れ子状の語りの例として、*Arabian Nights*をあげている。
Mieke Bal, *Narratology—Introduction to the Theory of Narrative* (Toronto: U of Toronto P, 1997), 52-53.
- 3) Gérard Genette, *Narrative Discourse—An Essay in Method* (Ithaca: Cornell UP, 1980)
- 4) 野家啓一「物語行為論序説」『物語』(現代哲学の冒険8)(東京:岩波書店, 1990), 52.
- 5) Hal May, *Contemporary Authors*, New Revision Ser. 14
(Detroit: Gale Research Com., 1985), 321. このほかにも、例えば、Jack Slay, Jr.はこの短編集が“much critical praise”を集めたが、読者は多くが“harshness and savagery”に不快感を持ったと述べる。
Jack Slay, Jr., *Ian McEwan* (New York: Twayne Publishers, 1996), 9.
- 6) Genette 248.
- 7) Genette 189-190.
ジュネットは従来使われてきた視点、視像といった言葉に代えて、「焦点化」(focalization)という術語を用い、混同されてきた、誰が見ているのかという問題と誰が語っているのかという問題を分けようとした。
- 8) Eve Kosofsky Sedgwick, *Between men—English Literature and Male Homosocial Desire* (New York: Columbia UP, 1985), 1.
- 9) Genette 248.
- 10) Genette 189-190.
- 11) Genette 40.
ジュネットは物語言説の時間と物語内容の時間における不整合の形式を表すためにも、独自の術語を採用した。予想、回顧といった主観的な現象を排除するために「先説法」と「後説法」を考え出し、総称的術語を「錯時法」とした。
- 12) Genette 249.

(たけおか ちよ 本学非常勤講師)